

ハプスブルグ展 日本—オーストリア友好 150 周年記念

国立西洋美術館（東京・上野公園）2019. 10. 19～2020. 01. 26

「ハプスブルグ家」は、広大な領土を支配下に収めて 600 年にわたる神聖ローマ皇帝を世襲するなど、ヨーロッパの歴史の表部隊に君臨し続け、彼らは何代にもわたって画家や芸術家たちの良きパトロンになりながら、優れた「絵画」「工芸品」に関する豊かなコレクションを築き上げてきたことで名高い。

本展は、日本とオーストリア国交 150 周年を記念して、「ウィーン美術史美術館」が誇る世界屈指の「ハプスブルグ家珠玉の収藏品」が展示されている。



左： ディエゴ・ベラスケス 《青いドレスの王女マルガリータ・テレサ》
1659 年 油彩/カンヴァス

画伯最後の肖像画作品で、モデルのスペイン王女 8 歳の「マルガリータ」は、広い額、厚い下唇、長いしゃくれた顎の顔や表情などが、成長につれてまさに“ハプスブルグ家の顔となっている”とされている。王女は、1600 年代にスペイン宮廷で流行した華麗な衣装に身を包み、右手に手袋、左手に大きな毛皮のマフを持つ姿で、青色の色彩とそのグラデーションが実に美しい。

中： ヴィジェ・ブラン 《フランス王妃マリー・アントワネットの肖像》
1777 年 油彩/カンヴァス

女王「マリア・テレジア」がフランス王妃となった愛娘「マリー・アントワネット」のために公式の肖像画として、お気に入りの女性宮廷画家に依頼した作品である。この絵画は、生き生きとしたバニエ付きの白いサテンの豪華な宮廷ドレスを身につけて、引き裾には王家の百花があしらわれ、若さと輝きを象徴するように描かれた作品は“高貴で優雅な名画”とされている。

右： レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン 《使徒パウロ》
1633 年 油彩/カンヴァス

画伯は、たった一人の登場人物を通じて、物語の内容が表現されるという類稀な芸術的独創性を有しているのが特徴で、本作品は、新約聖書の中のテサロニケ人への第二の手紙の筆者としての「使徒パウロ」を描いたものである。